

32. 失語症者における言語的プロソディー認知についての研究：アクセント異同弁別能力を中心として

○人江美緒¹⁾ 進藤美津子¹⁾ 長塚紀子¹⁾ 荒井隆行²⁾

¹⁾上智大学言語障害研究コース

²⁾上智大学理工学部電気・電子工学科

【目的】失語症者における次の点を検討する。①ピッチアクセントの認知能力について、②音の認知能力について、③アクセント認知能力と音の認知能力は独立しているか否かについて。

【方法】失語症者74名、健常者19名を被験者とした。両者とも日常的なコミュニケーションにおいて聴こえに問題がない者に限定した。各被験者群に、48問の異同弁別課題を聴覚提示により実施した。課題の1問は音韻的な面あるいは音質は同じ2つの音刺激の組み合わせからなる。本研究では便宜上、音刺激について、発話者の音声をそのまま使用したものを「自然音」、自然音におけるアクセントのピッチ曲線の傾斜を半分にしたものを「合成音」と呼ぶこととした。音刺激は、①有意味・無意味2モーラ単語、②のこぎり波・三角波、③合成有意味・合成無意味2モーラ単語、④合成のこぎり波・合成三角波の4種類に分かれた。

【結果と考察】(1)失語群と健常群の比較では、いずれの刺激の種類においても、有意に課題成績が低下していた。(2)失語群について重症度別に課題成績の差を比較したところ、軽度群はいずれの刺激の種類においても、健常群との有意差はみられなかった。失語群のみでは、重症度が進むに従っていずれの刺激の種類においても課題成績が低下することが明らかになった。(3)失語群について、2モーラ単語からなる課題の得点と、音課題の得点の相関係数は、重症度が進むほど高くなるという結果が得られた。このことから、失語症の重症度が進むにつれて、言語の意味情報や音韻情報よりも、プロソディー情報(ピッチの変化量)に注目している可能性が示唆された。

【結論】以上の結果から、失語症者はピッチアクセント異同弁別能力が障害される可能性が示唆された。